

宮崎を異郷として生きる出郷民たちの街と記憶 ——宮崎の沖縄・奄美タウン、波島をめぐる フィールドワークと聞き書きの記録

The Records of the Memories of the Okinawan and Amamis' Diaspora Living
in the Namishima Town in the Miyazaki City

渡邊 英理 ・ 福居 夏馬 ・ 李 陽

本稿は、宮崎市の沖縄・奄美タウン、波島地区を対象に、フィールドワークと聞き書きを行い、宮崎において「移民」によって形成された街や文化のあり方を考察するものである。波島地区は、戦前から戦後にかけて、沖縄・奄美からの「移民」が集住した「集落」、言わば、宮崎を異郷として生きる出郷民たちの街である。そのため、波島には、「移動」によって媒介された複数の文化が形成されてもいる。

日本文学ゼミ（専門演習ⅡおよびⅠ）では、この波島地区を対象として、2012年9月末から複数回にわたりフィールドワークを行い、また、2012年11月3日の午後、大学祭・凌雲祭にて、波島地区から二名のゲスト・大城規由氏（宮琉紬・伝統工芸師、宮崎沖縄県人会会長）、山内武氏（宮崎漆器・伝統工芸師）を迎え、トークセッションを行った。本稿は、そうした準備段階から、本番までの過程をめぐるひとつの記録である。なお、宮崎を異郷として生きる出郷民たちの街と記憶に関わる本稿の記述は、傷つき、傷つけられた者たちの秘められた記憶とそれを抱えて生きる生や身体をめぐる言語行為として、政治学者で詩人の李静和が提出した「つぶやき」という関わりを参照しつつ行うこととした。

キーワード：波島、沖縄・奄美タウン、移民／出郷民、異郷

目次

- I 波島へ関わるための言葉——大学・地域・学生、そして、誰かへ（渡邊英理）
- II 波島へ
 - 1. 大連から波島へ（李陽）
 - 2. サッカーから考える波島（福居夏馬）
- III 出郷民たちが生きる異郷の街と記憶——凌雲祭当日の断章（大城規由・山内武）

I 波島へ関わるための言葉 —— 大学・地域・学生、そして、誰かへ

——人は知識や情報を伝えるために出会うのではない。体験を伝えるために出会うのだ。

李静和『つぶやきの政治思想』

——大切なのは、これまで出会うことのなかった人たちと那些人たちによって生きられた時間を、今に呼び戻し、その時間を私たちがともに生きなおそうとする困難を共に迎えることである。そのとき求められているのは、無防備なままに身体の共振にみずからを委ね、私たちが「私たち」というカテゴリー化の働きにおいて遠ざけ傷つけているかも知れぬ人たちとの「共生」を模索する「求めの政治学」(李静和)にはかならない。新城郁夫「音の輪郭—高橋悠治の音楽とイトー・タリーの身体パフォーマンスを繋ぐ場所」『残傷の音「アジア・政治・アート」の未来へ』28頁

宮崎に波島という場所がある。戦前より沖縄・奄美の人々が移り住み、より集まってできた街である。その波島という街をめぐる、2012年11月3日(土)、「街を語る 路地を読む——宮崎の沖縄・奄美タウン、波島から考える地域と文化」と題し、宮崎公立大学・凌雲祭にて、トークセッションを行った。企画者は、日本文学ゼミ三年生(アカデミックアドバイザー制度で現在日本文学ゼミに参加している学生も含む)のメンバー、李陽、福居夏馬、野崎光里、河野瑞紀、坂本真理花、中尾梨沙および、本学教員・渡邊英理である。開催まで、複数回に渡り波島へ出かけ、波島の方たちと複数的な形で関わりを深め、当日は、波島から、宮琉紬・伝統工芸師であり、現在、宮崎の沖縄県人会会長を務める大城規由さん、宮崎漆器・伝統工芸師の山内武さんのお二人を話し手としてお迎えし、トークセッションを行った。本稿は、そうした準備段階から、本番までの過程をめぐるひとつの記録である。

波島をめぐる、語られ書かれする言葉。その言葉を紡ぐにあたって参照したいのが、政治学者で詩人の李静和が言うところの「つぶやき」という形での関わりである。

1991年、一人のハルモニが自らの記憶を話はじめた。金学順さん、日本軍の犠牲となった元「慰安婦」である。李静和の『つぶやきの政治思想——求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの——』は、そうしたハルモニたちの記憶や生をめぐる書かれた言葉である【註1】。ハルモニたちの生、それは、「恥をはにかむ」という言葉において束の間現れる生の形。傷つき、傷つけられた者たちの秘められた記憶とそれを抱えて生きる生や身体をめぐる書かれたこの散文／詩は、1997年に『思想』に発表されるが、ここで紡がれた言葉のあり方そのものが、一つの事件であった。それは、主体と客体、支配と従属、普遍と特殊、男と女など、さまざまな関係性を「現場性」の中でまなざし、そして、まなざすことで溶け合わせ、変容させゆく言葉であった。この散文／詩の中で、李静和は、そのような日本語を「発明」(鶴飼哲)したのである。

「分からないこと。分かってはならないこと。消費するのではなく受容しなければならないこと。それを語るわたしに、聞く我々に居心地の悪さを残す。外部からはどう解釈してもいい。だ

が、いったん枠に入った瞬間からは、解釈することを拒否しなくてはならない。／それが生きる場だから。／それを語るには、消費されない言葉、生き方における選択につながる言葉を見つけなければならない【註2】。そのような言葉を、李静和は、かりそめに「つぶやき」と名づけた。わたし／我々が、波島への関わりの中なかで、紡ぎ出したいと願っている言葉とは、この「つぶやき」という形の言葉である【註3】。

波島には、さまざまな事情で、その地に辿り着いた人々の記憶が降り積もり、生者とともに無数の死者たちが、いまも同居している。そして、それらすべての移動の軌跡は、みな、人間が作った歴史が強いる苛酷な力で生じ、また戦争という苛烈な悲劇によって翻弄された。そうした人々が抱える記憶へ。それを感じることができるもの。それが「針になっている体から／かわってゆく／まぜあってゆく／変異してゆく／“変態”してゆくからだち【註4】である。「変態”してゆくからだち」たる「たわむれる女神たち」として、わたし／我々——わたしたちは、波島の街を歩き、路地を語り、そこで出会った、戯れる無数の生者と死者たちとともにいて、いま、自らを開き、感じ、まじりあい、「つぶやき」はじめる。

II 波島へ

1. 大連から波島へ（李 陽）

日本に来て、この四月で五年目である。宮崎での大学の生活も、すでに三年経つ。この時期は、ある意味で人生で一番悩んでいた時期かもしれない。

桜の咲く季節に、わたしは、“日本文学”と出会った。運命というものは、誰にも予測できないものだろうと思うが、その出会いは、わたしの人生を変える道になるのではないか、と感じている。

2008年の春に、わたしは、生まれ故郷である大連を離れ、日本へ来た。大きなカバンを背中に背負い、海を渡って、異国での生活をスタートした。

遼東半島の最南端に位置し、緑に恵まれ、海に囲まれた海辺の町・大連。そこが、わたしの故郷だ。生まれてから、小学校六年まで、祖父と一緒に暮らした。祖父の家は、現在のわたしの家から、さほど離れてはいないが、しかし、そこは、自然豊かな場所だった。わたしは、小さい頃から、祖父と一緒に山に登ることが好きだった。山の頂上にたどり着いたら、祖父は、いつも岩に座って小休止するのが、常だった。その時の祖父は、自分の若い時の話をいつもぶつぶつ言い始める。

「今のあなたたちは、本当に幸せだよ、教育も良くなったし、生活も豊かになった。私達の頃の生活と比べようもない。わたしが幼い頃は、食料が少なく、米も一年に一回しか食べられなかったものだ。米はすべて日本軍に強奪され、生活は苦しかった。学校にまで、日本軍の支配は及んでいて、小学一年から六年まで“国語”としての日本語を勉強しなければならなかったんだよ、だか

ら私は…」と、祖父は、何かをのどに詰まらせたように、話を止めた。「お爺ちゃん、どうしたの？」とわたしがきくと、「何でもないよ、寒くなってきたから、おうちに帰ろう…」と、祖父は答えた。帰り道、祖父は、何も喋らず黙々と歩いた。後ろからついて歩いていたわたしは、祖父の後ろ姿を見て、不思議なもの悲しさを感じた。「お爺ちゃんは、何を隠しているの？」と、わたしはこころの中で独り言を漏らした。

二十歳の誕生日を迎えて、春になった。いよいよ日本への旅立ちの時だ。家族全員が、空港まで見送りに来た。父、母、姉、そして、祖父も来た。「祝你一路平安、万事顺利…」旅立つわたしに口々に祝福を与える家族たち。その中で、祖父は、何も言わず、ただ眼を真っ赤にして、しかし、笑顔でわたしを見送った。わたしは、何も言わずに別れた祖父が、本当は何を言いたかったのだろうと、気がかりだった。

日本に来て、一年が経ち、2009年の春、初めて帰国した。大連に戻り、家に着くと、すぐに、祖父の家へ向かった。「お爺ちゃん、ただいま」と、わたしは久しぶりに祖父に会える嬉しさ一杯の気持ちで言った。「よく帰ってきたね、元気そうだね」と、祖父は短い挨拶だけで、一年ぶりの会話を終えてしまった。

祖父が、長く胸にしまっておいた記憶をわたしに話し始めたのは、それから、三日後のことである。今年82歳の祖父は、1930年大連に生まれた。日本の傀儡政権満州国ができたのは、祖父が生まれてから二年後のことである。大連は、この満州国の一部であり、ということは、祖父の「祖国」とは偽満州国にはかならない。その満州国で子供であった祖父は、孫であるわたしには、想像すらできない幼年期を過ごしてきた。「小さい頃のわたしは、学校が怖くて、怖くて、行きたくなかったものだ。何故かというと、銃剣を持っている日本兵士がいつも並んでいた。そこで、私達は、日本語を話さなければならなかった。そこは、故郷ではなく、人間の地獄デスと思ったよ…」と、祖父は、旧い写真を見ながら、悲しい顔で言った。「故郷だよ、故郷なのに、まるで故郷ではないような毎日を過ごしたんだ。いつ自分の命がなくなってもおかしくない、そんな毎日だったんだ。いつかこんな日が終わり夜明けの光を見ることができる。そう心に祈っていたんだ。」と、祖父は、言った。その時の辛さ、その時の恐れ、その時の寒さを祖父は忘れることはできなかった。わたしは、やっと空港で祖父が何も言わずに見送ってくれたことの意味が分かった。わたしは、今、祖父が決して歩きたくはなかった道を選び歩いている。祖父が強制され学ばされた日本語を自ら選び学んでいる。そんな自分に、後ろめたい気持ちで一杯になった。中国人であるわたしが、日本語を学ぶことの意味とは、いったい、何なのか、そんな疑問がわたしを襲った。

それから三年後の2012年の夏、日本語を通じて、日本で出会ったのが、波島であった。戦争中に、沖縄の人々が、沖縄、奄美大島から何も縁のないところに移り住み、空き家に暮らし、町を作る。そうやってできたのが波島だ。日本に捨てられた沖縄は、戦争の運命からも逃がられなかった。日本軍に侵略され、母国語であるウチナーグチも強制的に禁止され、「標準語」すなわち日本語を強制された。つまり、沖縄は、日本の一部ではなく、日本に侵略された場所であり、更に無理

やり日本にされた場所である。故郷である大連も、もともと日本ではなく、日本に侵略され、日本が作った「満州国」の一部になった。沖繩から波島に移住した人たちというのは、自分の祖父とおなじような体験をしてきた人たちなのである。

戦争の時代に自由・平等の人生を追求することは、戦争の犠牲者であった波島の人たち、山内さんや大城さん、さらには、わたしの祖父にはできるはずのないことであった。彼らにとっては、ただ、生きることだけでも贅沢なのに、それ以上のことを考えることなどできるはずなどないのである。果てしてない人海の中で、波島と出会って、そして大城さん・山内さんと出会うことができた。その異郷の年輩の方々が、歴史の真実、歴史の残酷、歴史の中で生き残った人々の人生の経験を教えてくれる。

波島の人たちのことを考えるということは、わたしにとって、祖父のことを考えることである。波島について考えるということは、故郷・大連のことを考えることである。波島の人たちと祖父、波島と故郷の大連は、わたしのなかで重なっている。祖父が強制的に学ばされた日本語を学ぶわたし。その日本語を、いま学んでいるわたしは、日本語を通じて、波島に出会い、そして、祖父がかつて見たであろう風景を波島に見る。わたしが日本語を学ぶことの意味の一つは、そうした行為の中にあると、いま、考えている。

〔凌雲祭当日の配布資料を主とし加筆〕

2. サッカーから考える波島（福居 夏馬）

こんにちは。私は日本文学ゼミに所属する福居夏馬といます。わたしたちはゼミを通して、数回にわたって波島へのフィールドワークを重ねてきました。今日はそうしたなかで抱えてきた波島への自分なりの感想を話したいと思います。波島は大きな街ではありませんが、そこは戦後と現代が混じり合ったような不思議な時間の流れと魅力を感じさせる街でした。そんな街で私は「伊野波豆腐店」という文字が書かれた看板を見つけました。サッカー好きの私は特に、その看板に書かれた「伊野波」の文字に激しく動揺いたしました。そう、実は波島はサッカー日本代表のあの伊野波雅彦選手の故郷でもあるのです。こうした事実にも不思議な魅力を感じた私はここから、波島という地域とそこで生まれた伊野波、そしてサッカーとをからませながら波島という地域が自分たちにとってどのように語られるべきかを話したいと思います。

ですが、その前により深く波島と伊野波について語っていくために、まずはその伊野波が闘っている舞台であるサッカーについての話を少し聞いていただくと幸いです。

サッカーのみならずあらゆるスポーツはナショナリズムと切っても切れない関係にあります。なかでもサッカーはとりわけ盛んなスポーツのひとつで、現在200以上の国と地域で行われていますが、そもそもサッカーの発展とこれほどまでの普及には植民地主義の根があります。南米やアフリカの強豪国とヨーロッパ大陸の強豪国とはかつての植民地主義の支配・被支配の関係にあり、ブラジルやアルゼンチンのサッカーの普及度と実力の高さにはかつての宗主国の支配の強い

影を感じずにはいられません。さらに世界規模で行われるワールドカップをはじめ、サッカーはグローバルな資本とも不可分に結びついています。そしてサッカーはナショナリズムと特に深く結びつきやすいスポーツのひとつでもあります。事実、私達の周りでも様々なメディアを通して「日本代表」という声や文字を見たり聞いたりすることが多くなってきていますね。世界中に存在するたくさんの国々とその人々が誇りと威信をピッチに立つ選手たちに託す。そうした各国の代表として選手たちは闘っています。その気持ちを高揚させるものとして「国の代表」という言葉が用いられてきたのです。そしてそれが互いのナショナリズムを刺激することはもはや必然だと言えるでしょう。現にそれが最も顕在化したものとして1969年のエルサルバドルとホンジュラスの例があります。これはサッカーの試合によって両国の間にあった移民の問題や貿易摩擦、曖昧なままにされてきた領土問題などが一気に爆発し、泥沼の戦闘状態に陥った例です。このような極端な例はまだしも、サッカーの各国代表がその国のナショナリズムを象徴する存在としての側面を結果的に負わされてしまうことは少なからずあります。しかしこれから私たちが迎える「国際化」という大きな時代の流れのなかで新たな選手が現れてきています。それはサッカーがその発展とともに作りあげてきてしまったナショナリズムという枠を越えていくことのできる選手たちです。私はそのなかに伊野波という選手を位置づけることができると考えています。

みなさんはハーフナー・マイクという選手、あるいは李忠成という選手を知っていますか。彼らは二人とも伊野波と同じく「日本」の代表選手です。ハーフナー・マイクはオランダ人の両親のもとに生まれた日本生まれ、日本育ちの日本人です。しかしながら彼はオランダ語、英語、日本語と三つの言語を巧みに操るいわゆるグローバルエリートでもあります。ですがそんな彼も日本代表としてはじめて試合に出場したときはそのプレーではなく、容姿から多くの日本代表サポーターに騒がれました。「なんで外国人が日本代表の試合に出てるの?」「名前からして日本人じゃないじゃん」などと心ない言葉を投げかけられることもありました。日本で生まれ、日本で育ち、日本語を母語としていて国籍は日本のハーフナー・マイクはただ「見た目」が違う。白い肌で碧眼、おまけに背が高くいかにも「西洋人」風の姿で、流暢な日本語を使って自らを日本人だと名乗る。そんな選手の出現に困惑と拒絶を示す人々がいます。そういった人々はおおよそ、「日本とは単一民族によって成り立ってきた国なのだ」という神話のような、ナショナリスティックな感情からい言ったような言葉を発したと考えられます。そして「日本代表」マイクはそうした神話を信じる人々が描いてきた「日本」の境界線を越えていく存在として捉えることができるのです。

そしてもう一人、私が話したい選手は、先ほども少し名前を出しましたが、李忠成という選手です。彼は韓国籍をもつ在日韓国人の四世として生まれました。それは彼の曾祖父母が強制的に日本人にされたという悲しい事実を意味しています。彼のサッカーの実力は確かで、過去に19歳以下の韓国代表に選ばれた経験もあります。しかし、彼は悩んだ末に、日本への帰化を決意しました。その後、昨年のアジアカップのオーストラリアとの決勝戦で彼が叩き込んだ豪快なゴールが日本をアジアカップ優勝に導いたことはみなさんの記憶にも新しいと思います。彼は日本を救っ

た英雄となって、私たちが歓喜させてくれました。しかし彼には韓国籍を持ちながら日本に生まれて、韓国語よりも日本語をより上手く話せる自分の中に葛藤を重ねた日々も確かにありました。だからこそ私たちはこれを彼の「日本人」としてのサクセスストーリーの序章として語ってしまっただけではありません。彼は「自分は日本代表として闘う日本の国籍をもつ在日韓国人として、大きな可能性を示したい」と言って、あえて日本代表という場所で闘うことを自らの意志で選びました。彼がこれから私たちに示してくれるだろうその可能性とは一体何でしょうか。それは「自分の姓を隠す必要はない」という彼の言葉からも感じられるように、あくまでも在日韓国人としての可能性であるに違いありません。彼は、かつて日本人にさせられてきた者たちの末裔として、日本に帰化しながらも、歪な神話の中に生きる「日本人」になることを、「日本」に虐げられてきた記憶を携えて、拒み続けているのです。すなわち、彼の「日本代表」としての闘いとは、日本の内側から日本を打ち破っていくための闘いなのです。私たちはそうした彼の果敢に挑む姿から、彼の意志を感じ取ることができるのです。

さて、二人の選手について長々と話してきました。ですがこれら選手たちの、国家の境界線を逸脱していくための闘いを読み取ろうとすることは、重要なことです。それは伊野波を通して波島を見る、ということにも関わってくるのです。

伊野波雅彦は私をはじめに話した通り、波島を故郷にもつ選手です。波島とは沖縄、奄美の人々が流れ、住みつき、街になった場所です。沖縄は太平洋戦争の日本における最大の被害を受けた地域です。そして日本が本土を守るために米軍の侵攻を受けた場所です。沖縄にルーツをもち、その記憶をもつ彼もまた、李忠成と同じくかつての日本の侵略の歴史に抗う者だと言えます。戦火を逃れてやってきた人々が、生活のために大変な困難を乗り越えてきたのが波島なのです。沖縄の記憶を受け継ぐ、それは同時に沖縄戦の記憶を受け継いでいる、ということを決して忘れてはいけません。

沖縄戦とは最悪の地上戦でした。非戦闘員だった民間人が四人に一人の割合で犠牲になったあまりに痛ましい出来事です。当時、本土の日本軍司令部はもうすでに敗戦は確実だということはどうに感じていました。にもかかわらずこの沖縄戦を「持久戦」と称して最期まで戦うことを沖縄の人たちに命令しました。「最期まで戦え」とは死ぬまで戦えということです。そこで米軍に少しでも損害を与え、のちの和平交渉で「天皇制」を残そうと考えていたのです。沖縄は三カ月以上もの間、米軍の艦砲射撃を浴びせられました。透き通った青い海は戦艦によって埋め尽くされ、美しかった沖縄の毎日の風景は狭くて暗い、汚い塹壕に変わりました。日本軍兵士は米軍に向けるべきはずの銃剣を沖縄の人々に向けて「我々がこの島を守ってやっているのだから自分たちだけで逃げ出すことは許さん」と言い放ちました。それは沖縄という国を征服し、自然を破壊し、言葉を奪った者たちのあまりに理不尽な言葉でした。沖縄の人々にとってはハリボテにも等しい天皇陛下の権威と尊厳のために彼らの命は紙くずのように捨てられたのです。それでも「日本」はそうやって御国のために死ぬることを誇りに思え、と言う。そして日本は敗戦し、島はなにもかもなくなってし

まいました。故郷はなくなり、家族も、友達もなくなりました。思い出も未来もすべてなくなりました。

波島とはそうした戦争の悲しみと痛みの記憶を抱えた人々がつくった街です。今回、ゲストにお迎えさせていただいた、山内さん、大城さんもそうした沖縄の記憶を受け継ぎ、波島という地域とともに長く時間を過ごしてきた方々です。今回の場で、お二人から語られ、そして私たちに受け継がれた、沖縄という島、波島という路地の、記憶を辿る物語。それは今に生きる聞き手の私たちにとって知覚しえない、経験しえないはずの風景を、時間を越えて甦らせてくれる魅力にあふれた物語でした。そして一方で痛みを抱えた地域の物語でもありました。服従と戦争とを余儀なくされた沖縄の人々、そして、そんな彼らが逃れ、人々と共に記憶と文化が流れついた街、波島。この街に触れ、記憶に触れ、それを共有することはすなわち、彼らが負ってきた戦争へのやりきれない痛みを私たちと分かち合うということでもありました。心に負った傷をさらけ出すことは決して簡単なことではありません。それでも大城さんと山内さんの、自分が持つ記憶を若い人達に伝え残したい、という強い意志によって今回の場ができました。もう誰にも自分たちと同じような痛みを負ってほしくない、「日本」という国家の枠にとらわれて、誰かに痛みを与えてしまう人間にもなってほしくない。だからこそ痛みを分かち合いたい。私たちはそんな意志を受け継いだのです。そして今、伊野波雅彦というサッカー選手が、波島から「日本の代表」を勝ち取ったのです。波島出身の伊野波から私たちが感じとらなくてはならないのは「日本」の中に決して組み込まれまいと挑戦していく意志です。それは李やマイクが「日本」という場所に立ちながらもそれを越えていくために闘う自らを示すのと同じ意志に違いありません。伊野波が国際的な舞台で「日本代表」として闘うことにどんな意味があるのでしょうか。それを私たちが感じ取ろうとすることが、彼への確かな声援になるでしょう。そして、沖縄の基地の問題然り、痛みを押し付けることばかりがまかり通ってしまっている社会の中で、伊野波を知り、そこから波島という地域に出逢い、繋がりを得られたこと。それは沖縄の記憶とそれを受け継ぐ波島を覆い隠そうとする「日本」という枠を、私たちが解体していくために値千金となる一番最初のゴールになるのです。

〔凌雲祭当日の談話を主とし加筆〕

Ⅲ 出郷民たちが生きる異郷の街と記憶 —— 大学祭当日の断章

以下は、2012年11月3日(土)、「街を語る 路地を読む——宮崎の沖縄・奄美タウン、波島から考える地域と文化」当日の記録である。当日の声は、記録として、ボイス・レコーダーにすべて録音した。文字への起こしは、福居夏馬が担当した。セッション全体で交わされた言葉は、およそ、原稿用紙50枚以上の分量におよび、熟慮の結果、本稿では、その中で、特に、波島という地域、戦争・戦後の記憶に関わる部分のみを、一部、抜粋し掲載することとした。今回掲載できなかった部分、および、複数回の波島行きの中で手渡された言葉と声の記憶については、別稿を期し、文字に

残したい。また、これらの記憶を文字の記録に残し、手渡すことを心から切望くださり、今回の活字化にたいして深い賛同を示してくださった大城規由さん、山内武さんに、あらためて感謝を記したい。

渡邊　それでは、時間になりましたので、そろそろ始めたいと思います。こんにちは。宮崎公立大学、教員の渡邊英理です。今日は、日本文学ゼミ、凌雲祭企画「街を読む 路地を語る——宮崎の沖縄・奄美タウン、波島から考える地域と文化」にお越しく下さり、ありがとうございます。

日本文学ゼミでは、前期に沖縄文学の芥川賞作家・目取真俊などの小説を読み、また、現在開講されている日本文化論の授業でも、沖縄や奄美の文化、あるいは、沖縄・奄美から移住した人たちが生みだした文化というものについて積極的にとりあげ、わたしのほうから講義形式で話をしてきました。

今年は、沖縄の「日本復帰」から40年ということで、マス・メディアでも、沖縄の歴史や文化について非常に多くとりあげられています。わたし自身は、とある理由、個人的な出来事——幼いときにそばにいた、沖縄から鹿児島県の霧島へ「移民」として渡り、働いていた一人のお姉さんとの出会いから——、沖縄や奄美にたいして深い関心を寄せるようになり、これまでも、沖縄文学の女性作家である崎山多美の小説や、「奄美二世」の作家である干刈あがたらの小説について、考えたり、書いたりしてきました。そうしたわたし個人の沖縄・奄美への関心と、それを宮崎という固有の場所で、どのような問いとして開いていけるのか、とちょうどそんな風に考えていた頃、波島という場所に出会いました。

波島を最初に訪れたのは、九月の末、まだ、残暑厳しい折の頃です。わたしは、四月に、本学に着任したばかりで、宮崎に来てまだ半年ほどです。元々、熊本生まれ、鹿児島育ちの人間ではありますが、宮崎に来る前は、中国の天津にいて、その前は、主に東京におり、東京・天津を経て、宮崎へと渡ってきた、そんな「よそ者」のわたしにとって、波島の路地は居心地のよい空間でした。その後も、夏の終わりから秋にかけて、五回以上足を運び、波島の方々と関係をつくり、あたためてきました。その中でも、わたくしたちの企てに、深い理解と支援を与えて下さり、たくさんの時間を割いてくださったのが、今日ゲストでお迎えしている大城規由さん、そして、山内武さんです。今日は、その大城規由さん、山内武さんのお二人を波島からのゲストとしてお迎えし、トーク・イベントを開催したいと思います。

大城規由さんは宮琉紬の、山内武さんは宮崎漆器の、非常に熟練した腕を持ち、なおかつ、非常に名高い伝統工芸師であるわけですが、今日のお話のメインは、その伝統工芸の話というわけではありません。そうではなくて、山内さん、大城さんが、いかに波島に移り住むようになり、そして、その一生を、この宮崎の波島という地で送ることになったのか、という個人的な記憶、自分が生きて来たライフストーリーにまつわる物語です。そうした、ごくごく私的な、大切な記憶を、今日、この場で、お話くださることを快諾してくださった、大城さん、山内さんのお二人に、心から、感

謝申し上げます。ありがとうございます。

さて、今日の開催に向けて、日本文学ゼミでは、三年生を中心に、幾多の準備を重ねてまいりました。まず、看板代わりにおもてに掲示してある資料、御覧いただけましたでしょうか。ここには、わたくしたちが波島を訪れた折の写真と、波島の路地にあるさまざまな店先、風物の紹介がされております。これは、三年生のゼミ生、野崎光里さん、河野瑞紀さん、坂本真理花さん、中尾理沙さんの四人、いま、そこにいるメンバーたちが中心になって作成した資料です。波島の路地のあたたかな雰囲気非常によく伝える、充実した資料ですので、ぜひ、また、ゆっくりご覧いただければ、と思います。また、こうしたゼミ生を今日は代表いたしまして、お二人の話に入る前に、自身の私的な関心と関わらせながら、立案段階から長くこの企画をあたためてきた二人のゼミ生、李陽さん、福居夏馬くんより、ご挨拶とお話をさせていただき、その後、お二人の話に入ってまいりたいと思います。

大城さん 今紹介をうけた大城です。現在波島でですね、まゝ沖縄県人会長として一応まゝやってる関係上、渡邊先生からお願いがあったんで、受けましようか、という感じでやってきました。で、今までの会長は、歳の方だったんですけど、私は今現在69歳です、もうすぐ69歳です、誕生日が来たらですね。で、戦後ですね、もう67年経ってるんで、私とおんなじ年齢の人は、ちょうど沖縄から一歳のときに、疎開船が出たのが、昭和19年だから、19年。はやい人で18年。だから、遅い人で19年で来た人が、あ、19年はもう波島で生まれてる。19年の、何月か。それから、波島で。だから18年の人は一歳で来てるわけですね。同級生の方はだからほとんど一歳で、疎開で来たわけです。で、私はたまたま、疎開じゃなくて、今の現在の両親が亡くなったんですけど、大陸引き揚げ者で、引き揚げてきてあと子どもがいなかったんで、私は小学二年のときに、二年まで沖縄にいて、それから波島にやってきました。それで、まゝ薄々沖縄のことは少しはわかってます。で、でも波島でですね、疎開で、あの来た人たちのことは私では、一歳ですからね（笑）、私ではわからないです。今日はわかる人をですね、だから県人会で連れてきましたけども、波島にはですね、だから19年、19年で波島にきて、沖縄から疎開できた人たちが、最初は大部分で、それからそこで宮崎に疎開で来るとい人がまゝ、風の噂であちこちこう、都会まで広がって行って、都会の沖縄出身、それからですね、都会の奄美出身が、もう奄美出身言ったら、沖縄に非常に近いから、そういうことで波島に、やってきたですね、その疎開でやってきた人が、たくさんいます。だから波島には、沖縄から、直接疎開で来た人と、それと、噂を聞いて、都会から疎開で来た人、それが、混ざったところなんです。で、あとから詳しい話がいろいろ山内さんからありますけど、大部分の沖縄の人は、疎開で来た人達も、もう帰って、現在は沖縄出身はですね、まゝ約100軒おる、実際、若い人の世、三世、もう今三世若い人は三世。それから四世もできる頃だから、もう70年ぐらい年経つとですね。で、それで、今、波島は県、沖縄県人会という組織を、今さっき言ったように私が会長で、つくってるんだけど、そこに入る人がですね、もう若い人は、少なくなってきた。

実際、だから今、人数を100人少し足らず、と言ってきたのは波島、には100人足らずぐらいって言うのはそれは県人会の会に入ってる人ですね。名簿に載っていると。で名簿に載ってない人は、またあの、若い人はたくさんいるんです。それから、今ちょっと波島のこと、ばっかし中心なんで、宮崎県にはですね、宮崎県全体には、宮崎の全域に、疎開で来た、来てるから、宮崎の全体に、田舎のほうずっとですね、だからその、ま、県全体には、相当な、人が今、何十倍というはずです。宮崎県です、疎開で来た人達の名簿が、約16000人ぐらいなんです。それが、一般の疎開と、学童疎開とって、小学校の、5年生6年生以上の人ですね。その人達が学童疎開で、連れてきて、あと一般の人で、疎開を希望する人たちは、一般の疎開、それを両方合わせて、もう16000人ぐらい来てるから、相当、波島以外の、たくさん住みついている人います、田舎の方に。ただ、波島の場合は、たまたまかたまって、居るという状態で、このちっちゃな地域にですね、たくさんかたまってるとい状態なんですね。で、沖繩から疎開で来た人たちが、波島に、いろいろな職業の人がいるわけですね。それでだから、いろいろな文化を持ってきて、私の今、織物ですね。琉球、沖繩琉球紬、琉球織物を私たちがもってきたんです。私たちの、先輩がですね。それと、隣の山内武さんは、塗物をずっと、40年以上やとったんですけど、それ、琉球漆器ですね、そういうふうにして、沖繩から琉球紬、琉球緋とも言いますが、それから琉球漆器とかですね、そういう伝統をもって、現在は私は、宮崎紬として名を通して、山内さんは、のとは、宮崎漆器、に今現在変わってますけども、そういうふうな文化。それからあの、奄美の方の人たちはですね、大島紬、そういうような、文化をもってきて、その文化が今宮崎に根付いて、宮崎の今度は伝統工芸品としてですね、宮崎県が今、ま、育てていってるわけです。だから、文化ていうものはね、日本の本土の文化、焼き物ね。それが昔、朝鮮半島からやってきたもんが、元になってる、焼き物が多いんで、その焼き物が、朝鮮半島にあるときより、日本に来たら、それ以上のものを日本が、焼き物を作ると、あちこちで。だからそういうふうにして文化は、他所から流れてきた、今のは沖繩から来た文化。それがね、もとの文化よりそれ以上、発展することも、可能なわけね。山内さんはね、塗物、私は織物だけど、それが塗物でも、琉球漆器よりも、宮崎漆器が、立派なものをつくる可能性はあるわね。織物でも沖繩の織物より、私がしてる、織物が、沖繩にないものをつくる可能性というのが、いつもそう、秘められてるわけで。だからそういう面で宮崎の新しい文化というのを、宮崎では沖繩から来た人達が、それ以上のものを作る。沖繩の文化を乗り越えようとしてつくるといものを、それが自然じゃないかな。だから文化はそうしてどんどん進んでいくんじゃないかな、って。いろいろと文化ももってきましたね。だから新しいいろいろ宮崎の文化もできたから、そういう街が波島です。で、波島は皆、疎開で来た人たちは、荷物を持ってくるわけにいかないし、何も、手ぶらで来たわけだから、だから皆、ものすごい苦しんで今の街をつくったわけで、先輩たちはですね。で、それで波島の人達は貧しいなりにもですね、どっちかという、悪い子もいたし、良い子もいて、一生懸命勉強する子もたくさんいました。だから、悪いのと良いのがあった、子どもたちもですね、いろいろ良い方に走るか、悪い方に走るか、だから優秀な生徒も、優秀な人達も

たくさん出してるんです。で、それに反対に悪い人もたくさん出してます。そういう波島の、両極端の人達、あんまり中間が少なかったんですけど（笑）、そういうような、宮崎にはだいたい、もともと宮崎の県民性からすると穏やかで、ほとんど中間だから、波島の場合はちょっと、どっちかと言ったら宮崎では、宮崎の人から見ると激しい地域、いろいろ極端な人達が、子どもたちも。そういうような、街でした。で、そういうとこで、私たちも、みんな一生懸命、ね、もうほんとに、頑張っって子どもたちを少しでも立派に育てよう、っていう、もう親の代からまた子ども、今孫の代ですけどね、若者は。もう一生懸命がんばって天才になってます。で、あの、詳しいですね、疎開とかそういう話を今から、またバトンタッチしますので、ま、一応また、後からなんかいろいろ質問だったり、話します。一応終わります。

（略）

渡邊 波島地区の歴史、沖縄・奄美からの移動の概要がとてもよくわかりました。ありがとうございました。また、文化の話が興味深かったです。文化が移動することで得られるダイナミズム、移動して、そこにいたからこそ、飛び地のようにそれが残っていく、っていう側面もありますし、その移動によって、ある種ジャンプをして、そこで大きな花が開くということもありますし、それがすごく文化のおもしろいところだなあというふうに感じました。では続いて山内さんにお話を伺いたいと思います。

山内さん 山内です。今日は、若い人達が、中心に、話を、するというのを楽しみに、やって参りました。わたくしは、29年に今の宮崎漆器の琉球塗りというのに入って、そこで46年間、もう十年前に退職したんじゃないけど、そこで、琉球漆器というのですね。沖縄から疎開して、先輩の家に琉球漆器の技術者がおられて、で塗物を指導して、29年から46年間、そこで働いたわけなんですけど、沖縄に、小学校、与那原（よなばる）ところにですね、与那原っていう所で生まれて、私が小学校1年、まだ四月だったですからね、小学校に上がる前に、疎開というあれで沖縄、昭和18年頃なると、ちょっと慌ただしく、戦争ははじまる前の状況で、兵隊さんが、日本の軍隊が、沖縄に上陸してちらほら見られた18年でしたね。そのときわたくしの家は、ちょっと大きなお家なので、そこに、民家、民家に兵隊さんが、泊まらなければ、一軒に一人か二人は泊まるような状況の、ときだったですね。そして、四月ごろといったら沖縄は、でいごの花、もう大きなこの、一人や二人ではまわしきれないぐらいな、でいごの花という県木になるんですけど、そのでいごの花が美しく、咲いている時期でありました。そんな時期で、鉛筆を買い、ノートを買い、してもう一年に上がるなあっていうところの時期でしたよ、して学童疎開。小学校から学童疎開で、沖縄から、小学生だけ、先生が、連れて内地の方に、疎開する、というような、もうそういうときでした。でわたくしと兄弟三人、妹、弟、弟がまだ、幼くて、規由、大城さんとおんなじ、弟がおんなじ年でありました。

そういう時期で、母親と、沖繩、那覇港を、船で鹿児島の方に向ったんです。いまだったら船であつたら、もう24時間で着くけど、やっぱあちこち港辿っていくもんじゃかい、一日や二日じゃ、目的地に、鹿児島に着かんに、三日か四日ぐらいかかったと思うんですよね。して鹿児島に、母親とわたくし達の兄弟、母親が、子どもを三人連れて、鹿児島の方の、宿じゃなくて、お寺。お寺は広いですからね、鹿児島のお寺に寝泊まりして、そこに一週間ぐらい滞在してお世話になりました。小学校時代から、あんまり、まだ物事を考えることも、まだ1年生やったから、大きな考えもなかったけど、疎開してくるってなつたら、一週間ぐらいで疎開っていうのは、ちょっと旅行気分みたいな、真剣な、結果を見れば、戦争が起きる、という心配もなかったし、疎開するっていうたら、ちょっと一週間で、そこそこでまたもとの平和な、生まれた頃の、与那原にまた戻ってこれるなぁというただそれだけの気持ちで、もうそれも60何年か、戦後。それまで暮らすなあっていう見通しはなかった。弱者、若い者だけ沖繩に残って、戦う。で、赤ちゃんとか女は、手まどいになるから。疎開するよういって沖繩全島から、あちこち。私は与那原やけど、与那原からなんしょうたいぐらい、那覇の人間も、沖繩全島かためて、全員一緒に那覇港を船で疎開して鹿児島に着いて、お寺に、それぞれ、寝泊りして、鹿児島でお寺で、いろいろ探して波島っていうところ、川崎重工、川崎航空の社宅としてあるという、住む、家があるということで、鹿児島から宮崎に疎開、鹿児島から宮崎の方に疎開、今の波島について、今まで長いこと、また親も、戦争で、父親も亡くす、というあんな大きな空襲になるとは考えもせん。そういう状況で波島に疎開して、来たというのが、そんときの現状ですね。その時点では今の波島に行くという事はわかっていませんでした。で鹿児島に着いて、役所の関係の人が、お寺から、決まったのが一週間後で、宮崎の方に、疎開するっていうようなあれで、2、300世帯ぐらいは、鹿児島、本駅、あそこからそんときが汽車で、宮崎駅向かって、もうそんなころの汽車っていったら、もう煙を、今みたいな電車じゃなくて、あの煙をはく、みなさんは覚えていないかもわからんけどね。そういう汽車でもう、トンネルで、トンネル抜けたらもう煙がいっぱい、顔が真っ黒になるぐらいな、汽車に乗って宮崎駅に着きました。宮崎駅に着いたら、そこから田んぼ道を辿って、波島へ向かって、田んぼ道を歩いて、何百人っていうもうぞろぞろ歩いて、沖繩っていう文化は衣装も違うし、ヘアも違うし、女性はこうカンブーって言って、母親なんか、カンブーっていうてちょいちょい今の時代でも沖繩のテレビなんかで見るというあの状況の女性は、あれでしたよね。そしてそれから、一時間ぐらい歩いたか、ぞろぞろ歩いて波島に、着いて、そのころは波島っていうところはまだ、川崎重工業、川崎航空の社宅っていうような軍事的のあれで、住宅がつくられた、社宅かなんかというような所で、そこでいろいろ部屋割りをして、あっち行きなさい、こっち行きなさい言うて、部屋を何号、何号って、番号ついてましたよね、何号室、何号室って。山内は何号室に行きなさい言うて。して部屋割りして、波島にお世話になり、18年の六月に波島の今のところに住む状態でした。そこで私が、小学校から宮崎に住んで、それから小学校、憶小学校。四年までおって、して四年から今度は大宮小学校に六年まで、で大宮中学校に入学して、で卒業。そのころ、わたくし、親の生活っていうのが、やっぱ一番たいへんでしたね、

物が足らんから。食べるもんもない。浜からできた塩。塩だけのみそ汁、ていうか塩汁をとって生活した。来たばかりで、蓄えもないですしね。だから、住吉とか、近くの農家に、食べ物を、母親なんか私たち連れて歩いて、波島から、住吉、遠くまで行って、イモや食べ物を、分けてください、と言って、食べ物を分け合いして、して食べ物が全然不足だったから、まゝどこも日本中は食べ物にやっぱ不自由、食べ物がなかったっていう時代だったですからね、店屋に行って、買ってくるという状況やない。だから、塩なんかも一ッ葉、一ッ葉の浜に、行ってドラム缶、あれを切り開いてたいらにして、一ッ葉の浜の塩をつかって、晩、夜中に。やっぱ塩も国の専売だったから塩なんか勝手につくったらやっぱいかんとですよね。それでも自分で食べるものを考えなくちゃ、餓死してしまう。だから塩も、一ッ葉浜行って夜中、暗くなってから朝まで、やっぱ時間がかかるでしょ、塩水を。それで塩を手に入れた。いろいろな商売をして。それからちょっと恥づかしいことだったけど、ヤミていうのはやってはいけないですよ。ただそれをやっていかないってしたら、どうもこうもならん、だからヤミ焼酎ていうのが、やりだしたですよ。やっぱこれは今、ちょっと恥づかしいことやけどね。母親なんか私たち子どもを育てるためには、私の母親だけじゃなくて、ずっと住む人間はいろんなことをやっていかななくちゃ生活やっていけないいうて、ヤミ焼酎をつかって、ヤミ焼酎つくった粕でまた豚を養のうたりして。肉食ていうのは、今考えると、ちょっと贅沢品ですからね。だから波島というところは豚や滅殺やら、焼酎をヤミでつくったり、それそのためにまた、九州各地からもう今では考えられんほど、ものすごい活気。日本中どこ行っても物足らんから、焼酎ていうのがもう、全然、我々、晩酌ていうもんがない時代やから、焼酎を鹿児島やら、水枕に焼酎を入れて、水枕言ったら、四本入るんですよ。やかい四本入るから重たいんですよ。それをわからんように荷づくりして、それを運び屋が門司、鹿児島、大分へんから来て運んで、行ったり来たりする人達が増えてものすごい活気が溢れて、夜になるともうますますにぎやかで、夜中暗くなったら、焼酎つくるために薪で火を燃やして、蒸留水でつくるんですよ。やからそういう、寝泊まり一晚、泊まりで他所から運んだりする人ばかりいて、して疎開する人達も、波島にいる親戚やら、新聞、手紙やらであちこち行って疎開している人達が、波島に来て、300世帯ぐらいおった、沖縄から引き揚げたのに膨らんで、3000人近くぐらいは、今はもう2000人ぐらいかもしれんけど、そのちょっと増えて3000人近く増えて、家のない人でも他所からちょっと間借りで。私の家でも親子3人やけどもちょっとしばらくの間、宿を貸してくれ言うて4畳半と6畳あるけど、いろんな人が間借りをさしてくれ、言うて、その中に十何人ぐらい住むぐらいの、そういう時代でしたよね。波島ていうところはいろんな商売が繁盛して、それが続いたのが昭和30年ぐらいまで、そういうのが続きました。だからその十年間ていう間はジェームスやら、トラックに乗って500人ぐらいで、波島には焼酎あるよ、て指導に来たのを覚えています。一応これあたりで、私の経験として、ちょっとわかりにくいところがあったかもしれませんが、徐々にまた、話していきたいと思います。どうもありがとうございました。

渡邊 貴重なお話を、個人の記憶に関わるようなほんとに貴重なお話をいただき、ありがとうございました。山内さんと大城さんのお話を、私は事前に大城のお父さんの、紬の工場でお聞きしたんですけど、紬の機（はた）や糸があって、だんだんと夜が暮れていく中のこと。大城さんの落ち着いた、実直で正確な語りと山内さんの自分の、歴史の中で揺れ動いてきた物語のような人生と、というのをお聞きしていて、なんというか、すごく不思議な感覚だったんですね。私はその風景を、見たわけでもないし、その時代に立ち会ったわけでもないのに、なぜかそれが懐かしいような感覚に、襲われてしまって、今日はそういう意味では、そういった感覚を、できればみなさんに味わっていただきたいなあとということです。

山内さん わたくしもあと10年、早く生まれたら、この立場に、いなかったと思うんですよ。もう、沖繩で、中学生から戦争にやって、私も、戦っていたか、ていうのもおおいにあるんですよ。やからあと10年、早く生まれたら、大変なことやった。もう10何歳で、人生終わりやったかもわからん。大変な、時代に出会ったもんじゃなあと、ほんとに、人生が、何百年の間に一度の時代にはまった、ていうのが、大変な不幸、不幸な時代に過ごした、ということですよね。やっぱ小さいときの風景は忘れんですよ、環境も。蛍がもう火花のように蛍がものすごいこう、乱舞して、蛍の時期になると。蛍が飛んで、ものすごい、蛍がわあーって。夢のような環境。昭和17、8年の私の、七歳ごろの面影ていうのは、やっぱりいつまでたっても忘れんですよ。波島に来て、波島から一ッ葉の浜、晩、ゆっくり出ると、一ッ葉の波の音が、しゃー、ばちゃん、しゃーっていうのが、寝とってからこう、潮騒の音が聴こえて、もうほんとうに夜になると、穏やかな、静かな、そしてまた波島の近くに田んぼ。田んぼではカエルが田植え時期になるとゲゲゲゲゲゲてこう、寝とる、朝晩寝とるところにまでカエルの音やら、鳴き声やらが聴こえて、田んぼの溝を見ると、タガメとか、ゲンゴロウとか、小さな魚、メダカとか、いっぱい住むような環境の美しい、戦争前の環境が、沖繩にしろ、宮崎にしろ、ほんとにすばらしい環境で、だった時代を、戦争で壊されて、これも人災じゃから、これから人のちからで平和な、時代を迎えたらいいな、と思いますね。

渡邊 もし、こうやって、お話いただかなければ、山内さんひとりだけのものになってしまって、例えば、もし伝えられないまま、消えてしまったら、すごく惜しい。そういう気持ちで、今日はお聞きしているところなんですけれども、他に聞きたいこととかありませんか？。

学生 貴重なお話ありがとうございました。これは沖繩出身でない、僕個人としての、質問なんですけど、今、テレビをつけると、沖繩というのが、米軍の基地の移設とか、最近は、オスプレイの問題もそうだし、また少女の暴行とか、そういう悲しいイメージ、が、日本に定着してると思うんですよ。沖繩＝戦争の中心地で、米軍の基地があって、で、悲しい、沖繩＝悲しい。そういうイメージを、心のどこかでみんなもってると思うんですよ。で、僕が思うのは、沖繩には、日本全体の70%

以上の米軍の基地がある、でもそれは、仕方のないことだ、っていうふうな思いを、日本の国民のほとんどの人が、もってる、心のどっかでもってる、と僕は思うんですよ。でも絶対にそれは間違ってる。それは沖縄の問題である前に、日本の問題であるから、それは日本全体で解決すべきなんだと、僕は思ってるんですけど、でも今の現状的に、沖縄に基地があることは仕方のないことだ、っていうのが、国民の、やっぱり、大半のひとが思ってる。沖縄っていうのは歴史的に明との朝貢関係だったり、日本に帰属させられたりとか、そういう歴史のなかで、それは過去のものとして、これから沖縄というのは、どういう方向にむかっていくべきなのか。米軍基地も含めて、どう日本全体で対処すべきなのか、訊きたいんですけど。

大城さん それは、ま、政治家が真剣に沖縄のことを、考えてないということじゃないかな。どうしてかというたら、誰でもわかってるように、日本の、75%の基地が沖縄にあると、で、沖縄の面積は日本の0.6%。そういうところに、それだけ日本全体の75%の基地があるっていうのは、普通では考えられないですよ、それはやっぱり政治家が真剣に、沖縄のことを考えてないと、ということしか考えてない。いかに沖縄が地理的に、中国とか、東南アジアに、北朝鮮に睨みが利くいい位置にあるにしても、地理的なものは、どういうふうな形でも沖縄の基地の軽減のためには、できる考えがいくらでもあるはず。それが、日本全国沖縄以外の県は全然基地を拒否する。だから結局、一番大きな問題は、一般国民が拒否するのはそもそも自然の成り行きだから、誰でも来て欲しくないんだから、それを政治家が、説得していかんといかんわけだわ。だからいかに日本の政治家が沖縄を犠牲にしても、沖縄を犠牲にしても構わん。そういうのが内心、やっぱりあると思うんですよ。だから悪く言えば、沖縄は犠牲になりなさい、と。おんなじ民主主義の国だったら、それは、大きく言えば法律や憲法にもう違反してると思う。オスプレイの問題が今出てきたけど、オスプレイは全国で訓練をすると、全国に飛ばすと、それがひとつの引き金になって、全国で国民が沖縄のことを真剣に考えようと、あちこちで騒ぎ出したら政治家も無視するわけにはいかないから、だからそれは沖縄のためには、もちろん今普天間にオスプレイをもってきたのは悪いけど、それがあちこち訓練を沖縄以外で全国でする、展開するっていうのはみんなに沖縄のことを考えてもらういい機会にはなと思う。とにかく、沖縄をもう少し全国民が理解し、特に政治家っていうのは、それを考えないと、あまりにも矛盾したようなことを平気でやってる。そして続いていると思う。それはみんな、特に若い人中心にして、そういうこと考えて欲しい。日本の体制ていうのを変えていくためには、結局若い人が立ち上がらなないとだめなわけよ。今の政治家というのはほとんどのひとが、私たちもそうだけど、私たちも、戦前の軍国主義を経験した人達から教育を受けてるメンバーだから、だから新しい教育を受けた、人達が、ね、新しい若い人達を、ほんとの平等な社会、そういう民主的な社会をつくるためには、みんなが平等にいろいろおんなじような条件で、すべてを負担し、いろいろなことを受けあうというような、そういうのを、若いみんなが今からどんどん、声を盛り上げていくこと。それから若い、みなさんたち、先生たちや生徒たちも一緒に

もっと展開しないと、日本の国民の意識を変えないことにはね、今の状態なかなか簡単に変わらないし、沖繩の基地を減らすことはなかなかできない。

山内さん　けど、早く戦争終わって、よかったとも思うよね。いつまでも粘ったたら、沖繩が終わったら、次は一つ葉浜から上陸するていうとった。沖繩から宮崎に疎開してきて、それがまた沖繩のように、一つ葉浜に上陸したら、疎開してきたところにまた、二重な被害を受けたら困った。我々の一つ葉に米軍が上がってきたら、っていう噂があったもんじゃから、ずっと、高鍋のむこうまで米良までまた何泊か疎開したことも、あるんですよ。宮崎に、波島からまたあっこへ、二重の疎開したこともあるかい、一時。高鍋のむこうまで、田舎まで疎開したことがある。だから、もうちょっと粘れば宮崎もまた沖繩同様に、二の舞になったかしらん。だかいなるべく、早く終わってよかった、思うよね。何のために戦争やったか。家庭から、羽釜や鍋など、金属はみんな、家にあるもの、いろんなもんとって、それを軍事につかって。それまでして戦争する。なんで戦争をいつまでも。我々住民まで、被害を受ける戦争というのを。耐えれんですよ、家庭を、めちゃくちゃに崩してしても。財産も。なんで、あんな戦争、最初から、せんかったら…。やっぱり戦争というのも、よう考えて、今から進んでいかないとね。大変な、もう何百年経っても、被害を受けるのは、我々弱い立場の人がそうあるから。だから平和の時期がずっとずっと続いたらと今から、思いますよね。世の中がもう雲泥の差。我々の時代の何年か昔はどういう時代じゃったか。発言ができなかったんじゃから。これから、戦争があったらどうなるか、どういう惨めな生活だったか。ずっとつくりあげた文化もばぁにして、壊すような世の中じゃつまらん。そんなんじやつまでたっても人類は、平和にも、豊かにもならん。なんぼ贅沢なんやっても、人間が馬鹿な人間だったら、馬鹿な世界になるから。そうならんことをしっかりと見届けて世の中を、つくっていいたらいいなと、私はそう思う。

渡邊　まだまだほんとはいっぱい、一晚喋っても、語り尽くせないようなお話、密造の取締りの話とか、ま、これはまたどこかで。今日お話を聞いてわかったとおり、沖繩という場所にゆかりのある者にとって、平和や戦争がない状態に対する希求、望みがやはりすごく強い。それはなぜかというやはり最も激しい戦火を帯び、最も戦争によって、運命が翻弄された地域だからなんですよ。だから、私これは授業でも言うことなんですけど、例えば、沖繩に基地が集中している、とかいうことっていうのは、最も戦争が嫌で、軍隊とかそういうものが嫌な、はずの沖繩に、そういうものが置かれている、つまり、沖繩では戦争が終わってもまだ、戦争が押しつけられてる状態なんじゃないか。そういう状態をなくすためには、今日お二人が強調してくださったように、やはり若い人たちが変わらなければいけない。変わっていくためには、こういった経験を受け渡していく場所が必要で、そういったひとつの機会として、今日のこの場は、作らせていただきました。みなさんそれぞれの形で、それぞれの感受性で、受け止めてくださった言葉を今度は自分の中でなんな

りかのエネルギーにしていだければ、うれしいなぁというふうに思います。

山内さん 生い立ちから話して、人生そのもの、戦争そのものを話して、時間も忘れて、疲れもなんもない。むしろ楽しかった。私としては。こういう喋り方ほんとは下手なんです。ただ思ったとおりにも言うけど、決してうまいことを言えずに、あっという間だった。でもまだまだ疲れもせんし、うれしい。今日は、こんな若い人達に、話せて大変うれしく思います。これからもよろしくをお願いします。

大城さん 沖縄県人会の人達はですね、もう昔の話をあんまりしたくない、という人もいる。いろいろ詳しく波島のこと、疎開のこと、そういう話をちゃんと聞いたのも、私もはじめてなんです。個人でそれだけ話してくれるっていうのも。だからそれだけ若い人に伝えたいという意志が強かったかなぁ、って。私も個人的に先輩の話を聞いていろいろ勉強になりましたから。

山内さん やっぱ生まれたところというのはいつまでも頭に残ります。沖縄から疎開した文化は、戦争のことは忘れんでいつまでも発展して、いきたいというのは私の気持ちなんです。

渡邊 これに懲りずにまたお付き合いいただけるのであれば、こういった場を設けたいと切望しております。素晴らしいお話をしてくださった、大城さん、山内さんのお二人に、心からの拍手をお願いしたいと思います。今日は本当にありがとうございました。

〔2012年11月3日 午後13時30分～16時 宮崎公立大学・研究講義棟4階 視聴覚室
参加者45名(延べ人数)〕

註

【註1】「つぶやきの政治思想——求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの——」の初出は、『思想』1997年6月号。また、この文章は、他の五つの文章とともに、同名の単行本としてまとめられ、1998年、青土社より単行本化された。

「遠い島の友へ……尹東柱「たやすく書かれた詩」『思想の科学』1995年2月号

「友人はみな“軍人”だった」『思想の科学』1992年11月号

「記憶と表現」『嶋田美子展カタログ』（慶應義塾大学アートセンター 1996年）

「ある「まなざし」の経験」『現代思想』1997年8月号

「忘却は蘇るか」『思想』1998年5月号

【註2】『つぶやきの政治思想——求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの——』より。なお、本書には、頁番号がふられていない。

【註3】なお、波島へのフィールドワークは、本文中であげた専門演習Ⅱの履修者（三年生）だけでなく、専門演習Ⅰの履修者（二年生のゼミ生と留学生）も行っており、凌雲祭当日も、二年生のゼミ生が多く参加した。協力した専門演習Ⅰの履修者（二年生のゼミ生と留学生）は、13名で、以下の通りである。志摩啓一郎、塚本里奈、荒木香帆、市木友梨、大久保弘樹、小田歩、川西あこ、齊藤亜未、眞名子晴加、宮崎光、馬暁玲、賀愈、邊多熙。

【註4】李静和・編『残傷の音 「アジア・政治・アート」の未来へ』岩波書店2009年6月 X頁。これは、李静和および英文学者の故・村山敏勝らが中心となり企てた「アジア・政治・アートプロジェクト」（成蹊大学アジア太平洋センターの共同研究プロジェクト 2006-2008）から生まれた本である。本稿の第一著者である渡邊英理も沖繩や吉祥寺などで行われたでその一部の企てに参加したこのプロジェクトは、李静和が『つぶやきの政治思想』のなかでその可能性を肯定した、弱者や、あるいは疎外されている人々を抱擁しうる、抱きとる力としての「斜め線を引かれた母性」によって支えられているものであった。「国家イデオロギーとか女性イデオロギーを超えるような、その隙間を逆に乗っ取るような〈母性〉が、弱者や、あるいは疎外されている人々を抱擁しうる、抱きとる力として働きうるならば、〈母性〉なるものをあえて否定する必要はないのでは」。「抱えこみ、抱き取るやさしさ」。そうした「斜め線を引かれた母性」となり、なにかを感じ、まぜあわせ、生者と死者とに戯れる身体が、「変態」する身体である。『残傷の音』の「序文のために ゼンダレ もしくは献体の花」の中で、李静和は、その「“変態”してゆくからだたち」たる「たわむれる女神たち」を記している。「“変態”してゆくからだたち」たる「たわむれる女神たち」。それはまた、本稿の冒頭に引用した新城郁夫の言葉によるならば、「私たちが「私たち」というカテゴリー化の働きにおいて遠ざけ傷つけているかも知れぬ人たちの「共生」を模索する」「求めの政治学」のただ中に自らをおく、「無防備なままに身体の共振にみずからを委ね」る身体のことにはならない。

引用文献

李静和『つぶやきの政治思想——求められるまなざし・かなしみへの、そして秘められたものへの——』青土社 1998年12月

李静和・編『残傷の音 「アジア・政治・アート」の未来へ』岩波書店2009年6月

参考文献

李善愛 「国際化はまず足下から——宮崎市A町の事例から——」

『宮崎公立大学公開講座5 国際化再発見!』宮崎公立大学公開講座広報委員会2000年12月

李善愛 「宮崎のウチナンチュ」

『宮崎公立大学開学10周年記念論文集 地域に根ざして 宮崎～九州～アジア』

宮崎公立大学開学10周年記念論文集発行委員会2004年2月

本山謙二 「鹿児島市のシマ」

『奄美戦後史——揺れる奄美、変容の諸相』南方新社 2005年

東琢磨『ヒロシマ独立論』青土社 2007年7月

著者および発言者

渡邊 英理(宮崎公立大学・准教授)

福居 夏馬(宮崎公立大学・日本文学演習)

李 陽(宮崎公立大学・日本文学演習)

大城 規由(宮琉紬・伝統工芸師、宮崎沖縄県人会会長)

山内 武(宮崎漆器・伝統工芸師)

